

I-0484

0241

バイエラツウル伯招請

分類 I. 1. 12. 0. 9

I-0484

0242

0243

I-0484

文書課長

文書課發送

昭和拾年十二月廿六日發送済

淨書

正校(原稿)

倉田(淨書)

昭和十年十一月廿五日起草

別紙

主管 情報部長

主任 第二課長

報二普通第

七九六號

昭和拾年十二月廿六日

日附 附屬

受信人名

東京市長  
牛塚虎太郎

發信人名

天沼情報部長

記録件名

件名

「バイエラツウル」の招請方に関する件

本件に関する左白有田大使ヨリ別紙寫ノ通電報越

懸案

この下に付委曲右ニテ申す意ノ上何分ノ儀ニ急申

公 信 案

外 務 省

四市七殿交々此御依頼中進ス

(別紙) 左白有田  
東京市長  
牛塚虎太郎ノ宛  
寫作奉送付ノコト

五九号

公 信 案

外 務 省

文書課長

文書課發送

昭和拾年七月廿六日發送済

淨書

正校

(原稿)

(淨書)

別紙

主管 情報部長

主任 第二課長

昭和十年十一月廿五日起草

報二普通

第二七三六號

昭和

昭和拾年七月廿六日 日附 附屬

受 信 人 名

丸ビル内三七七五  
大日本体育協会  
副会長 平隈亮三

發 信 人 名

天羽情報部長

件 名

ソバイエ「ラウール」伯根諾方、蘭ス件

本件ニ関スル在在有田大使未電高御書

許送付ス

(有田大使未電御書「ソバイエ」ノ内容添付ト)

公 信 案

外 務 省

26 56

懸案

I-0484

0244

秘

高  
在  
協

電信寫

昭和 十八年七月 廿二日 陸 武府 廿二日發  
本軍 十一月廿三日 前着 陸、情

有田 有田大使 廣田 外務大臣 宛 電報 寫 (十一月廿三日 有田大使)

第五九號

去ル七月 議員同盟會議 參列 伯 往訪 東京市ノ名ニ於テ日本ニ來遊方 招請シタルコトアリタルカ

士月廿二日 伯 招請シタルコトアリタルカ 其後 伯 招請シタルコトアリタルカ

タルモ何レモ 條件 招請シタルコトアリタルカ 以テ如何トモ決シ兼キニ

月「オリンピック」ノ關係 日本ニ來遊方 招請シタルコトアリタルカ

キニ付 條件 成ルヘク 詳細ニ 承知 致度 向 伊國カ 申 催方ヲ 断念セルヤ

ニ 停メラルルキ 委員會ノ 何等 通知ヲ 受ケ 居テ スト 決 定シ 居ルニ 於テ ハ 其ノ 時 日 條 件

市ニ於テ 伯ヲ 招待スルコトニ 決定シ 居ルニ 於テ ハ 其ノ 時 日 條 件

金額) 等 至 急 御 回 示 相 成 度 シ

尚 其ノ 條 件「ラッセル」 伯ハ 伊モカ 南 儀方ヲ 断念セルヤニ 傳

ヘラル、モ 委員會ニ 放テ、何等 通知ヲ 受ケ 居ラザル

申 添ヘタリ。

I-0484

0245

全篇二通

電信課長

主管情報部長

主任第二課長

昭和十年十一月二十九日起草

30 05

ア  
第二課

十月廿九日辰  
氏事務本電令代  
ト打合所

電送第 13970 號

昭和 10 年 11 月 20 日 午後 7 時 0 分 發

宛	在 白 有 田 大 臣 休
件	「ラウウル」伯招請ニ関スル件

名件録記

廣 田 大 臣

第三〇號

貴電第五九号ニ関シ

東京市ニ於テ「ラウウル」伯ノ來朝ヲ歓迎シ

テリ時日ハ本邦ノ氣候等ノ關係上来

電信案

外務省

(原議用紙乙)

春三月頃ヲ適當ト認メ、旅費滞

在費(夫人ト同伴)スルモノトシテ、約貳萬圓

ヲ見積リ居ル趣ナリ

尚星島代議士ハ「ラウウル」伯ニ對シ東京

市ノ名ニ於テ招請セル趣ナルカ右ノ同

代議士ノ注意ニ依ルモノニテ東京市ト

シテハ右ノ妥協シタル次第ニハ非サル由ナルモ

電信案

外務省

I-0484

0246

電  
信  
案

外  
務  
省

同伯、来朝セラル、ニ於テハ歓迎スル  
心組ニテ唯成ル可ク正式招待ノ形  
ヲ避ケ度キ意向ナル趣ナリ

(原議用紙乙)

I-0484

0247

昭和十年十二月廿日

廣田外務大臣宛在日大本林代理大使電報寫

電報「ラ伯招待ノ件ニ因リ

同伯ノ正式招待ヲ辭ケ個人的旅行ノ形式ヲ以テ

来ル三月廿一日横濱着ノ稜父丸ニテ本業(東)四

月九日横濱発光同船ニテ帰ル途ニ就リコト申

ニ決定セルカ同伯ハ夫人ヲ同伴セズ從者一名

公 信 案

外 務 省

ヲ世中同ノ苦ナニ処右費用(用)電ニ依リ

カ内リ當カマテ合算ト爲レ旅費一ツ千円(摩

在費)其他四千円合計一ツ五千円ヲ東京ネ

ニ於テ負擔爲スコトニテ解済マナニ付市

倒ト街打合セ、上右金額送金方成ニ可ク早

目ニ西(西)債相煩度レ

尚「伯」從來日本側カ「オリムピック」委員会

公 信 案

外 務 省

I-0484

0248



3  
4  
5  
6

<p>ラ無視レ「ムツソリー」首相ニ運動ヲ爲レ或ハ  <small>ノロコトニ付テ</small>        博覧會ヲ開催シテオリムピック大会ヲ利用セ  <small>等</small>        リ「印」象ヲ本邦便招致運動ニ注シ  <small>口物ヲ派ラセルニア</small>        満ノ東洋ヲ居ルモノモ  <small>イタルモ</small>        情ニ鑑ミ南洋ニオリムピックノ開催ハ不可能ナ  <small>ル</small>        ルノト決リ居シリ極意ニ</p>	<p>公 信 案</p> <p>外 務 省</p>
---	---

I-0484

0249

秘

昭和10年二月廿一日 武府 本省 十二月廿一日前着 日後發 情

阪田外務大臣

大森代理大使

第六一號

貴電第三〇號ニ關シ

「ラ」伯ハ三月廿一日横濱着ノ秩父丸ニテ渡日、四月九日横濱發

同船ニテ歸途ニ就クコトナレリ

ニ訪日ノ形式ハ正式招待ヲ避ケ伯ノ個人的旅行ト云フコトニ了解

三伯ハ夫人ヲ同伴セス從者一名ヲ帯同スルニ付旅費一萬一千圓、滯

在費等四千圓、合計一萬五千圓ヲ東京市ニ於テ負擔ノコトニ了解

評（貴電御來示ノ二萬圓ハ秘シ置ケリ）右全額東京市ト打合セノ

電信寫

寫  
そのまゝ  
ス

上早目ニ御送金相煩度シ

四伯ハ日本側カ從來「オリムピック」委員會ヲ差遣イテ「ムツソリ

トニ」ニ運動シ或ハ博覽會ノ景氣付ケニ「オリムピック」ヲ開催

スル如キ宣傳ヲ爲セリトテ大層不滿ノ口吻ヲ洩ラセルコトアルモ

最近ハ伊太利モアノ様子ニテハ「オリムピック」ヲ開クコトモ出

來サルヘント語リ居レリ右爲念

瑞西へ暗送セリ

文書課長

文書課發送

浄書

正校(原稿)

(浄書)

主管 情報部長

主任 第二課長

昭和十一年一月六日起草

報二機密

通第

號

昭和十一年

一月六日附

附屬

情報部ヨリ  
特使便ニテ送  
送ス

懸案  
海井

件名	受信人名	發信人名	記録件名
バイエラツウル伯招待ニ関スル件	東京市役所 市役案内所 清水照男	田代第二課長	
本件ニ関シ在白大森代理大使ヨリ別紙寫ノ通來電越シタルニ付テハ委細右			

公 信 案

外 務 省

ニテ両了采心ノ上何分ノ措置相煩度  
此致仰依頼申進ス

在白大森代理大使差電第六一號(十二月廿二日着)寫  
一部作取ノ上添付ノ下

公 信 案

外 務 省

秘

昭和11 一四一八 略  
武府 廿四日後發  
本省 一月廿五日前着  
情

大森代理大使

第二號

客年在滿第六一號ニ關シ（「ラツウル」伯招待ニ關スル件）

東京市へ左ノ通

「ラ」伯ハ二月二日武府發 GERMANY ニ至リ NICE ヨリ乘船ノコトニ關  
定ヲ變更セルニ付武府出發前ニ一萬五千圓手交發度ク右至急電發相  
成度シ

電信寫

I-0484

0252

全寫二冊

電信課長

主情報部長

主第二課長

昭和十一年一月二十九日起草

在武府  
大森代理大俠

廣田大臣

電送第 1063 號  
昭和十一年一月二十九日午後六時〇分發

先「ラ」の伯末朝ノ件

名件録記

第二號

貴電第二号ニ関シ

邦貨壹万五千圓相当額ニ付  
(24750) 四十七、五十九、

貴官宛 田代情報二課長 如ク以テ二十九日

電信案

外務省

田代情報二課長

(原議用紙乙)

電送セリ

電信案

外務省

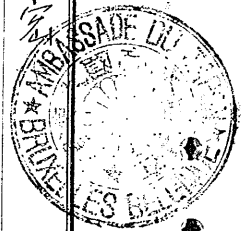
29 28

I-0484

0253

情報部

核  
査



第二課長

二月二十四日接受  
別紙添付

昭和十一年一月三十一日

在 白

大 本 林 書 記 官

外務省情報部

田代第二課長 殿

拜啓陳者、先送相成タル邦貨一萬五千円（西・七五〇  
「ベルガ」ハ本日「オリンピック」委員長「バイエ・ラッフル」伯ニ  
手交セルニ付、領收証別添ノ通り茲ニ送付申上候  
尚同伯ハ從者一名全件三月二十日前後ニ横浜着ノ事  
宜先此同人ヨリ依頼越ノ次亦又有之ニ付、帝國「ホタル」

在 白 日 本 大 使 館

ニ部屋留保方傳配處相煩度、又當館發給横濱税  
關長宛簡易通關依頼狀ヲ同伯ニ持交セルメタルニ便  
宜供與方ニ關シテハ、何合ノ傳盡力願ヒ度、此段傳依  
頼事ニ得貴意候

敬 具

在 白 日 本 大 使 館

I-0484

0254

COPIE

Reçu la somme de BELGAS VINGT-QUATRE MILLE SEPT  
CENT CINQUANTE (Francs belges 123,750.00) Contrevaleur  
de Quinze mille Yen (¥15,000.00)

Bruxelles, le 31 Janvier 1936.

I-0484

0255

電 信 案	外 務 省	十六日当地友同魚「ラトウール」の十八日の林出為ノ旨傳へ居 ル処徑踏並ニ從者ノ氏名資格師 <sup>回電アリ</sup> 查報相成表	電送第 1864 號	主 管 情 報 部 長	電信課長 全篇二通 19 4 昭和十一年二月十八日起草
			昭和十一年二月十九日午後 0 時 35 分發	宛 在 法 井上隆行代理大使	
			件 ラトウールの素朝件	任 主 第 二 課 長	
			第 二 八 號	發 廣 田 大 臣	
			名件録記		

I-0484

0256





文書課長

文書課發送 昭和拾壹年參月 參日發送済

淨書

正校(原稿)

昭和十一年三月廿七日起草

情報部長

主任 第二課長

報二普通 第

二四 號

昭 和 拾 壹 年 參 月 貳 日 附 屬

附屬

受 内 務 省  
唐澤繁係長

天沼情報部長

名 人 信 受

名 件 録 記

名 人 信 發

名 件

「オリンピック」委員長「バイエラール」伯の便宜供與方依頼ノ件

國際「オリンピック」委員長「バイエラール」伯 (de Comte de Baillet-Latour) の第十一回國際「オリンピック」大會東

懸案

公 信 案

外 務 省

京南信方ニ関スル實地視察ノ為来ル 三月廿日横浜  
入港ノ後又丸ニテ来朝スル趣ナルニ付テハ全伯ノ本  
邦入國々旅行ノ旨シテ旅費ノ便宜供與方ヲ以テ  
配上慮ヲ煩及ビ段御依頼申込ス

公 信 案

外 務 省

文書課長

三原

文書課發送

昭和拾壹年參月 貳日發送済

淨書

三原

正校(原稿)

昭和一十一年二月廿五日起草

主管 情報部長

主任 第二課長

報二普通 第一五五號

昭和拾壹年參月貳日附 附屬

大尾名  
石浜主税局長

石浜情報部長

受信人

發信人名

件名

「オリンピック」委員局長「バイエ、ラッセル」伯の便宜後與方依頼ノ件

記録件名

懸案

公信案

外務省

de Baillet-Latour

ハ第十二回國際「オリンピック」大會

國際「オリンピック」委員局長「バイエ、ラッセル」伯 (de Comte)

東京南依方之関与実地視察ノ為来ルニ三月廿日横

濱入港ノ秩父丸ニテ来島スル趣ナルニ付テハ全伯

横濱上陸ノ際ニ於ケル各地視察ノ以尚易通商ニ方

可也甲配上層ノ様式ハ假令依頼申進ス

公信案

外務省

2 100

I-0484

0259

文書課長

文書課發送昭和拾壹年參月 參日發送済

淨書

正校(原稿)

昭和十一年二月廿五日起草

主管 情報部長

主任 第二課長

報二機密 第 〇三 號

昭和 昭和拾壹年參月 貳日 附 附屬

東京市長 千塚虎太郎

天和情報部長

受人名

發信人名

件名

ラッセル伯ノ永長ニ関スル件

懸案

公 信 案

外 務 省

別紙寫ノ通申越シタルノ旨詳細右ニテ申了急ノ上  
本件ニ関シ在任大森書記官ヨリ参事部四代第二課長宛

2 98

公 信 案

外 務 省

帝國ホテルノ部屋予約方ニ付テハ貴方ニ於テ可也  
市配慮ヲ煩交向ラレ伯本邦上陸ノ際ニ於ケル概  
関簡易通関方ニ関シテハ貴方ヨリ大森名入依頼  
ニ長キタルノ旨右ニテ申了承キ奉交シ  
別紙在任大森書記官書付寫作本全所寫佛文モ  
併ト寫し添付ノコト、但し右佛文寫作本係存ノコト

I-0484

0260

10.10

10.10

ハイエ、ラールの末朝  
歓迎準備打合せ

一、二、三、四

一、三月四日午後二時懇話会館にて開催  
出席者別紙の如く

二、ラールの並其従者二十日横浜着  
四月九日迄三週向本邦滞在の準備  
懇談シタレト三巴文部次官より列席者

外務省

10.10

場り意見ヲ求メ結局大體左記事項ノ決  
定ヲ見タリ

(1) 滞本邦中ノラールの旅程歓迎細目  
付テハ文部外務親元東京市ヨリ  
成ル小委員ニ於テ具体案ニミテ作り  
置キラールの末朝上田伯ノ選擇ニ妥  
スト

(2) 各地ニ於テハ歓迎方法等ニ付テハ小委  
員會ニ於テ聯絡決定ノコト  
更ニラールの末朝前第十三回国際オリムピ

外務省

10.10

I-0484

026

内 構 省 部 文  
 會員委致招會大クツピムリオ際國回二十第

列席者 姓名

○ 岩	○ 三	○ 田	○ 天	○ 森	○ 牛	○ 大	○ 平	○ 副	○ 嘉
原	邊		羽		塚	島	沼	島	納
	長		英	俊	虎	又	亮	道	治
拓	治	誠	二	成	郎	彦	三	正	郎

横 里 清

ツク本邦側準備ニ付テハ之ノ説明ニ  
 得ル程充分懇談ヲ重ネ置キ爲テ  
 本邦側招致委員會ヲ開催スル要アリ  
 本月中頃迄之ノ場所ニ集會スル事ト  
 之ヲ文部省側ヨリ各委員ニ通知ノ旨  
 尚觀光局長田氏ヨリヨリルレ伯鉄道無賃乗  
 車券ハ文部省ヨリ公文ヲ以テ請ホル由ナルモ鉄  
 道省内規ニテハ外人肉保ハ外務省ヨリ公文ヲ以テ  
 請ホリタリ  
 尙書省ヨリ公文ヲ以テ請ホリタリ  
 ト内務アリタリ

外 務 省

10. 10.

I-0484

0262

内 構 省 部 文  
 會員委致招會大クツピムリオ際國回二十第

列 席 者 氏 名

岩	三	田	大	森	牛	大	平	副	嘉
原	邊	羽	塚	島	沼	島	道	治	納
	長	英	俊	虎	又	亮	道	治	五
			太						郎
拓	治	誠	二	成	郎	彦	三	正	郎

内 構 省 部 文  
 會員委致招會大クツピムリオ際國回二十第

天羽孝二 殿

拜啓陳者國際オリムピック委員長ハイエ・ラツール伯來ル三月二十日  
 秩父丸ニテ來朝、約二週間滞在シ我國ノ狀況ヲ觀察致スコトト相成候  
 ニ就テハ同伯ニ對スル歓迎其ノ他ニ關シ種々御懇談願度ク御多用中乍  
 懇縮何卒御接合セノ上來ル三月四日午後二時神田學士會館（三階第一  
 號室）ニ御來臨賜リ度此段御案内申上候  
 昭和十一年三月二日  
 敬具

第十二回國際オリムピック招致委員會  
 幹事長 三 邊 長 治



I-0484

0263

文書課長

文書課發送 昭和拾壹年參月 六日發送済

淨書

正校(原稿)

昭和十一年二月 日起草

主管 情報部長

主任 第二課長

報二 普通密 第

號

昭和昭和拾壹年參月五日 附 附屬

喜安 鉄道次官

重久 外務次官

受 信 人 名

發 信 人 名 記 録 件 名

件 子際「オリムピック」委員長「ラッセル」伯、其貨乘車迄發給方  
名 依頼ノ件

子際「オリムピック」委員長「バイエ、ラッセル」伯 (M. de Comte

懸案

公 信 案

外 務 省

「ピック」大會開催地、関スル 実地視察ノ為 秘書一名  
 全伴未ル三月廿日横浜入港ノ 鉄文丸ニテ未長スル  
 趣ノ 処 全伯ノ 本邦視察後ニ於ケル 態度ハ 本邦自  
 邦ノ 熱望セル 第十二回子際「オリムピック」大會東京  
 開催方法定上、影響有スル 所 歟ル 大ナルヘント思フ  
 セラレ、ラ以テ全伯 本邦滞在中、其未得ル 限りノ 便宜  
 ヲ 供與シ 交渉ニ於テ 未長ノ 目的ヲ 達スルニシム

公 信 案

外 務 省



公 信 案

外 務 省

〃 極メテ望マシキ儀ト存セラル、之付全伯及全秘  
 書ニ対シ<sup>夫々</sup>未ル三月廿日ヨリ向フ三週間通用ノ貴  
 者鉄道一等及貨乗車函送給方巾改議セ被  
 以御依頼申進ス  
 追テ秘書ノ氏名ハ判明次第御通報致スヘキニ  
 付右巾含置申交シ

I-0484

0265

情報部長 第二課長

「ラトゥール」伯歓迎ニ関スル件

三月七日「オリビオン」招致委員会標記1件ニ付

小委員(於工業博覧会)

出席者 副島伯、大島又彦氏、大久保市助氏

出席者 岩原伸吉課長(田親史局長欠席)

天羽部長代理、室崎

決定事項

一、歓迎「フワウラム」副島伯ニ付ノこと

外務省

三、接待「フワウラム」在ノ談氏

作事協会 平沼 亮三氏

高島 文雄氏

近藤 氏

東京市 辰野 保氏 (校長)

草田 氏 (秘書長)

浪江 耐三氏

M. Chevalier

外務省

I-0484

0266

三、米、船、西大使、昔南公使、自代理大使、本、招待

(晚餐、午、晚餐)

東京市、主催、晚餐会

別島、招待、晚餐会

村、局長、高松、室、殿、下、市、主催、パーティー

四、地方、旅行、日光、箱根、京都、奈良、佐、賀

五、土産物、一件、暫、定、淡、塗、小、品、等、類

六、滞在、費用、旅、費、等、大、所、全、部、東京、市、が、負担

外務省

I-0484

0267

情報部

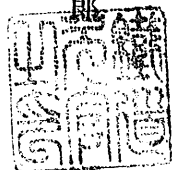
官文第五四七號

第二課長

昭和十一年三月拾八日接受  
別紙添附

昭和十一年三月九日

鐵道次官 喜安健次郎



外務次官 重光 葵 殿

三月五日報二普通第二六號ヲ以テ御申出ノ國際「オリムピック」委員長「ラッセル」伯及同祕書ニ對シ無賃乘車證發行ニ關スル件右了承乘車證左記ニ依リ發行加封致候間御査収相成度

記

一等級 一等

二區間 省線一般

三期間 自三月二十日 至四月九日

三月十九日  
長田 葵  
手交ス

TOKYO, THURSDAY, MARCH 19, 1936.

### The 1940 Olympics

Count Henri Baillet-Latour, chairman of the International Olympic Committee, arrives in Japan today to find a nation that is more than anxious to have the 1940 Olympic Games, the next to be held following the Berlin games this summer, staged in the city of Tokyo. One of the strongest committees that Japan could form is already at work with this end in view, detailed plans for arrangements as regards grounds and other necessary facilities are in process of being worked out, and ways are being considered for the raising of the large sum of money that would be required in order that Tokyo should in no way fall short of other cities of the world which have played the host to the greatest gathering of amateur athletes in existence.

Japan wants the 1940 Olympic Games held here and is prepared to go to any legitimate lengths to secure them. This nation wants them in a way that no other nation has desired them but that is peculiarly Japanese. Japan's emergence into the front rank of the great athletic peoples of the world is of quite recent date, but its place there is already secure. To be host now to the acknowledged major athletic contest of all times would be, in Japanese eyes, the public acclaim of this fact by all nations. It would in truth be the laurel crown of victory for the Empire in this respect.

That, of course, is not sufficient reason why the committee in charge should award the 1940 contests to Tokyo, but there is no good reason why the games should not be held here and many reasons why they should. Most important among these is, of course, that this right has been won by the remark-

able progress and achievement made by this nation in the realm of Western sports, a progress that is almost entirely a post-war development. True, distances are greater between Japan and many of the participating countries, but it must be remembered that Japanese athletes have been compelled to travel these distances when attending previous Olympics, and that the Japanese team is usually second in numbers only to that of the United States. Nor are these distances as great as they seem.

The world has fallen into the habit of thinking of Japan as being very far away indeed, but this is largely a habit of thought and probably a survival of pre-liner, pre-airship, pre-continental railway days. Will the Finnish athletes, for instance, require more time or money to cover the distance between their homeland and Tokyo than were needed for their trip to Los Angeles four years ago? Certainly, if the Trans-Siberian route be used, as it most probably will be, the financial cost to Finland will be less. Japanese shipping lines, at least, may be safely depended upon to offer reduced fares to Olympic contestants, and perhaps to Olympic spectators traveling not only from Europe but from the United States, Australia and elsewhere. The same reasoning that applies to Finland holds good for all Europe, and as for the United States only ten days to two weeks are needed to sail from an American Pacific coast port to Tokyo's nearby port of Yokohama.

The restless energy and ambition which forever burns in the Japanese to equal if not excel all others in every line of endeavor makes itself felt in the world of sport, and it can be safely recorded that this Empire will never rest content until full equality therein has been reached and acknowledged by the West and the seal of that achievement placed on it by the granting of the Olympic

Games. Most indicative of this attitude which is not confined to athletes but extends to all Japanese is the personnel of the national committee of 66 men charged with securing the 1940 Olympics for the Japanese capital. Prince Iyesato Tokugawa, heir to the Shoguns for many years President of the House of Peers, Japan's delegate to the Washington Conference of 1921-22 and an outstanding national and international leader in innumerable other ways, heads that committee. Among its members are found many of the most influential and respected statesmen, financiers, industrialists, diplomats, educators, promoters of international friendship and heads of sports organizations. The list is an impressive one, probably as impressive a group of men as the Empire could muster for any cause.

These men are undertaking this work primarily because they believe it to be for the good of the State, rather than because of a deep personal interest in sports themselves. They are working more for the glory and welfare of Japan than for the promotion of Japanese amateur sport. This same spirit makes itself felt among the athletes of this nation who participate in the Olympic Games. The Japanese swimmer, for instance, who competes with the American and others at Berlin this summer will feel that the honor of his country lies in his hands—or, rather, in the strength of his arms and legs and deep chest as he plunges through the waters. The high jumper, the pole vaulter, the skier and all other Japanese competitors are actuated by the same motive. Is it to be wondered that, spurred by such thoughts, the Japanese have in a decade and a half climbed to the high place they now occupy?

That this place is a high one is not open to dispute. What Japan has done in tennis is a well known story, although of very recent years the Empire has produced no outstanding stars to compare with Kumagai and Shimizu who went to the challenge round against Tilden and Johnson in the Davis Cup play a decade ago. At Los Angeles the Japanese swimming team won the world crown, and only last September defeated an invading aquatic team of the best that the United States had to offer. In horsemanship and in other fields the Japanese competitors ranked high, and there is little doubt that new and greater laurels will be garnered by them in Berlin this summer. This progress is all the more remarkable when its speed is remembered, for it was not until 1928 that Mikio Oda, by winning the hop-step-and-jump, brought Japan its first Olympic victory. Baseball goes back considerably further in Japanese athletic history, but in every realm of sport the Japanese now make a most creditable showing.

There has come—there could not help but come—with this wholesale embracing of Western sport a psychological change in the younger generation of this land. Such sports as Old Japan enjoyed were strictly individualistic and based primarily on the military code, each man being for himself and himself alone. Team play and its sacrifice of the individual to the good of the team were unknown. Football can be played on no other principle than this, however, and the Japanese who learns this on the playing field cannot but help, unconsciously at least, to carry it over into his extra-athletic life. This spirit will manifest itself more and more in all phases of the nation's life and policy as the present generation succeeds to

power. Not only have victories in war been won on the playing fields of England, but also at the conference table, and the present attempt to solve the Rhineland and Locarno Pact questions peaceably offer ample proof thereof at the moment. It is, of course, in this psychological training in good sportsmanship that the games of the West proffer their greatest gift to the world, valuable as the accruing physical good may be. This is becoming a component part of Japanese mentality which will make itself felt with increasing emphasis as the years pass, for the charge that the West has only a material civilization to offer is one that cannot be supported by fact.

Japan is especially desirous of obtaining the Olympics for 1940 as that year marks the 2,600th founding of the Empire, according to orthodox Japanese history, and a gigantic world's fair is to be held in this city. Plans for this exposition are already well under way, and thousands of visitors will be traveling to Japan four years hence. The Olympic Games would come as a major

added attraction. It has already been decided that the sum of ¥7,000,000 will be spent on building a monstrous new stadium in which the games may be held. An Olympic Village and other necessary structures and conveniences will also be erected. Funds will be supplied in part by the National Government, by the Tokyo municipality and by private subscription, while there will naturally be some revenue from the gate receipts of the games themselves. Once Japan is awarded the games and has set its mind on them, the question of necessary finance will automatically solve itself. At present, Finland is the only real contender against Japan for the 1940 Olympics, Italy having withdrawn from the field. Because of its athletic achievement, an achievement little short of marvellous, Finland is quite as entitled as Japan to be host to the world's greatest amateur athletes, but since this summer's games are to be held in Berlin it is only right that the next contest should go to some other section of the world, and that section should be the one with Tokyo as its center.

新 昭 和 年 月 日

新 昭 和 年 月 日

ハイエラツト伯帯在日程

月日	午前	午後
三月廿日	東京市長訪問 文部省 外務省 陸軍省	明治神宮参拝 岸氏ノ墓
廿一日	休 美食	東京朝日 (午後三時)
廿二日	休 美食	東京日々新聞 社主催講演會 (午後三時) 日比谷公會堂
廿三日	明治神宮外苑 競技場其他 施設實地 視察	帝國大學(三時) プール 弓道場
廿四日		招致問題ニ 関シ懇談
廿五日		招致(午後八時)
廿六日	習志野?	独立大使招待
廿七日	學校視察	芝罘スケート場 (二時半) 高松宮家 (四時十五分)
廿八日	習志野?	中山龍馬

廿三日	工業クラブニ 於テランチ (東京市接 待ノ分)	バルギ一大使招 待 (午後七時半)
廿二日	オリンピック招致 委員會々長 招待 (午後一時-三時) 徳川邸	觀劇(東京市 招待ノ分) 歌舞技座
廿一日	大日本體育 協會長招待	東京市長招待 (紅葉館)
廿四日	招致(一時)	小晩飯會
廿五日	招致(一時)	
廿六日	習志野?	
廿七日	喜加納氏 招待	
廿八日	習志野?	

I-0484

0270

七日	六日	五日	四日	三日	二月	四月一日	三十一日	三十日	廿九日
	中禪寺湖觀光	日光發 (十時)?	箱根ハライフ 竹相根發	京都發	京都見物	甲子園行 運動施設 視察	奈良發	京都見物	京都行 (燕)
						神戸市招待	山崎加賀氏 招待 (天政へ)		
ゴルフ	日光昇歸京	東照宮参拝	東京着	宮之下泊	京都見物	須磨舞子 ドライブ 住友別邸参観	大政見物	奈良行 奈良見物	京都着 (午後四二五)
副島伯招待 (東京クラブ)	東京泊	日光泊				京都へ ミヤコホテル泊	大政府市招待 新大政ホテル泊	奈良ホテル泊	京都市長招待 (野村) ミヤコホテル泊

I-0484

027:

十二日	十一日	十日	九日	八日
				東京市長招待
				ラッセル伯主催の 宴会

I-0484

0272



三月廿一日  
三月廿二日  
三月廿三日  
三月廿四日  
三月廿五日  
三月廿六日

廿三日	廿四日	廿五日	廿六日
明治神宮外苑 競技場其ノ他 ノ施設實地視 察			曹志野
工業クラブニ 於テランチ （東京市接待 ノ分）	大日本體育協 會長招待	外國大使招 待 （午後二時）	
	引續キ招待 ニ關シ懇談		
外國大使招 待 （午後七時半）	外國大使招 待 Y.C.A.C.招待	フィンランド公使 招待 （午後八時）	副島伯招待 （午後八時）

月日	三月廿日	廿一日	廿二日
午前	到着休養	休養	休養
午後		オリムピック 招致委員會會 長招待 （午後二時—三時）	東京市紅十字 會招待
午後		東京日日新聞 社主催講演會 （午後三時）	
午後		東京市長招待 （紅十字會）	
晩	小晚餐會		觀劇（東京市 招待ノ分） （午後七時半）

パイエ・ラッセル伯滞在日程  
14/5 9p 10p

I-0484

0273

三月十八日  
 渡辺 辰ヨリ 東京市側 上毛委  
 上 御分、御区事 至多心甲  
 上知ハレ

東京市草間氏ハ

廿二日	<p>観劇 (東京市接待ノ分)      歌舞伎座</p>	<p>午後三時</p>	<p>観劇 (東京市接待ノ分)      歌舞伎座</p>	<p>観劇 (東京市接待ノ分)      歌舞伎座</p>
廿三日	<p>明治神宮外苑      競技場其ノ他      ノ施設實地視察</p>	<p>工業クラブニ於テランチ      (東京市接待ノ分)</p>	<p>引續キ招致問題ニ關シ懇談</p>	<p>外國大公使招待      ベルギー大使等      (午後四時)</p>
廿四日	<p>大日本體育協會長招待</p>	<p>引續キ招致問題ニ關シ懇談</p>	<p>外國大公使招待      Y.C.A.C. 招待</p>	<p>外國大公使招待      Y.C.A.C. 招待</p>
廿五日	<p>外國大公使招待      (午後八時)</p>	<p>引續キ招致問題ニ關シ懇談</p>	<p>外國大公使招待      (午後八時)</p>	<p>外國大公使招待      (午後八時)</p>
廿六日	<p>香志野</p>	<p>引續キ招致問題ニ關シ懇談</p>	<p>外國大公使招待      (午後八時)</p>	<p>外國大公使招待      (午後八時)</p>

I-0484

0274

二日	四月一日	三日	三日
京都	京都	京都	京都

廿九日	廿八日	三月廿七日	月日
京都行 (一泊)		午前 午後 午後 晩	午前 午後 午後 晩
休	中山 行	各種競技場 某地視察	
美良			

バリエーション・カッパル旧滞在日程

I-0484

0275

九日	八日	七日	六日	五日	四日	四月三日	月日
		←	中禪寺湖 観光	日光 （十時）		京都	午前
	東京 招待	←	↓				午後
			日光 行	車 （日光）	東京	宮之下	午後
	ラ ン ン 伯 主 備 々 会	副島 伯 主 招待	車 主 伯	日光	シ ム ニ ア		晩
							餐

バイエ・ラン・ン伯滞在日程

I-0484

0276

文書課長

長

文書課發送昭和拾壹年參月拾六日發送済

淨書

正校(原稿)

録書

昭和十一年三月十一日起草

主管 情報部長

主任 第二課長

報二普通第

三三

號

昭和拾壹年參月拾六日附屬

喜安鉄道次官

喜安 次官

受 信 人 名

發 信 人 名 記 録 件 名

件 名

喜安鉄道次官の秘書の氏名通報ノ件

本月五日所往信報ニ普通第二六號ニ関シ「ラッセル」

懸案

公 信 案

外 務 省

記

Harry Creygie

公 信 案

外 務 省

16 55

I-0484

0277

情報部長

「アンリ・ド・バイエ・ラツール」伯爵

(「ベルギー」人「ブラッセル」居住)

「ベルギー」ノ「ルーベン」大學(法科)ヲ優等ニテ卒業。少時、外交官トナリ、廣ク旅行セリ。

得意ノ「スポーツ」

乗馬「平地競争、障碍物競馬、英國及佛國ニ於ケル狩獵、」  
「ポロ」競技

若年ニシテ「ベルギー」ノ競馬俱樂部及馬質改良協會ノ會員トナレリ。

一九〇三年 國際「オリムピック」委員會ノ「ベルギー」代表トナレリ。

一九〇四年 「ブラッセル」ニテ國際體育會議ヲ組織セリ。

同年「ベルギー」「オリムピック」委員會ヲ成立セリ。

一九一四年 巴里ニテ一九二〇年大會ヲ「アントワープ」ニ開催セシメ、  
「アントワープ」ニ開催セリ。

外務省

10. 10.

大戦中「ヘーグ」ノ「ベルギー」公使館付トナリ母國ノ爲ニ大イニ努力セリ。

一九二〇年 「アントワープ」ノ「オリムピック」實行委員トナリ

萬人周知ノ成功ヲ收ム。

現 在 國際「オリムピック」委員會會長

「ベルギー」競馬俱樂部ノ會長 (「ベルギー」ニ於ケル全競馬ノ統制ヲナス「クラブ」ナリ)

英國競馬俱樂部ノ會員

「ベルギー」國家體育委員會及「オリムピック」競技會會長。

「ベルギー」國家高等體育會議ノ會員。

「バイエ・ラツール」伯ハ「アマチュア」體育ノ熱心ナル擁護者ニシテ、「スポーツ」ノ興業化ニ對シテハ敢然ト戦フ者ナリ。

外務省

10. 10.

I-0484

0278

「アンリ・ド・パイエ・ラツール」伯爵  
 (「ベルギー」人「ブラツセル」居住)  
 「ベルギー」ノ「ルーベン」大學(法科)ヲ優等ニテ卒業。少時、外交官トナリ、廣ク旅行セリ。  
 得意ノ「スポーツ」  
 乗馬「平地競争」障礙物競馬、英國及佛國ニ於ケル狩獵、「ボロ」競技  
 若年ニシテ「ベルギー」ノ競馬俱樂部及馬質改良協會ノ會員トナレリ。  
 一九〇三年 國際「オリムピック」委員會ノ「ベルギー」代表トナレリ。  
 一九〇四年 「ブラツセル」ニテ國際體育會議ヲ組織セリ。  
 同年「ベルギー」「オリムピック」委員會ヲ成立セリ。  
 一九一四年 巴里ニテ一九二〇年大會ヲ「アントワープ」ニ期進セシメテ提案セリ。

外務省

大戦中「ヘーグ」ノ「ベルギー」公使前付トナリ母國ノ爲ニ大イニ努力セリ。  
 一九二〇年 「アントワープ」ノ「オリムピック」實行委員トナリ萬人周旋ノ成功ヲ收ム。  
 現 在 國際「オリムピック」委員會會長  
 「ベルギー」競馬俱樂部ノ會長 (「ベルギー」ニ於ケル全競馬ノ統制ヲナス「クラブ」ナリ)  
 英國競馬俱樂部ノ會員  
 「ベルギー」國家體育委員會及「オリムピック」競技會會長。  
 「ベルギー」國家高等體育會議ノ會員。  
 「パイエ・ラツール」伯ハ「アマチュア」體育ノ熱心ナル擁護者ニシテ、「スポーツ」ノ興業化ニ對シテハ敢然ト戰フ者ナリ。

外務省

I-0484

0279

情報部

外秘第五三七號

昭和十一年三月二十三日 警視總監 石田 馨

第二課長

昭和十一年三月廿四日接受

内務大臣 潮 惠之輔 殿  
外務大臣 廣 田 弘 毅 殿  
文部大臣 潮 惠之輔 殿  
神奈川、京都、大阪、橋本、兵庫、愛知、長崎 各府縣長官 殿

國際オリンピック委員長

入京並行動豫定ニ関スル件

麹町區内山下町帝國ホテル止宿  
國籍、白耳義國

伯爵 Count Henri Baillet-Latour

右者西曆一九四〇年東京ニ於テ國際オリンピック大會開催ノ可否ニ付實地調査ノ為本月十九日午後四時五分東京驛着列車ニテ横濱ヨリ秘書佛蘭西人 *Henri Baillet-Latour* ヲ帶同入京シ牛塚東京市長、オリンピック委員嘉納治五郎、平治亮三其他約五十名ノ出迎ヘヲ受ケ東京市差廻シノ自動車ニテ帝國ホテルニ投宿シ午後四時三十分ニハ來訪ノ記者等ニ對シ來朝目的其他ニ関シ概要左記ノ如キ談話ヲナシタリ  
尚本名滞邦中ハ別記日程表ニ依リ行動ヲ為ス豫定ナルガ滞京中ニ於テハ東京市囑託渡邊耐三、同白耳義人シバルリ及大日本体育協會員近藤茂吉ノ案内ニ依リ其ノ他ノ場合ハ河渡邊近藤ノ兩名ガ案内ヲ為ス模様ナリ

右及申(通)報候



別記

今回來邦セルハ來ル一九四〇年度ノオリンピック大會ヲ東京ニ開催シ得ルヤ否ヤニ付場所ヲ實地調査ノ目的ヲ來邦セルモノニテ手紙ノ上計リデナク實際ニ場所ヲ見聞シテ充分調査シタモノヲ國際オリソピック委員會ニ掛ケ適否ヲ決定スルコトニナルノデアル

此處ニ諸君ノ注意ヲ促シタイ事ハ國際オリソピック大會ノ開否ハ場所ノ適否ヲ調査シテ其ノ開否ヲ決定スルモノヲ決シテ國ノ優劣ニ依ルトカ其間ニ政治的意味ヲ含ムモノヲハナイ（此處ニテ國際オリソピック委員會ハ純然タル体育團體ヲ何等政治的意味ヲ有セス各國委員モ亦國家ヲ代表スルモノニアラズ唯其ノ個人ノ委員タル資格ヲ有スルヤ否ヤニ依リ委員トシテ選拔サレルモノデアルカテ或國デハ數名ノ委員ヲ有シマ或國デハ全然委員ノナイノモアルノデアル等オリソピック大會

會ノ開否ハ設備場所ノ如何ニ依ルモノニテ何等政治的意味ヲ有セザルコトヲ説明ス、而シテオリソピック大會ハ決シテ其國ノ大會デハナク運動參加國人ノ大會デアルトテ今回猶太人排外ノ獨逸ニ於テオリソピック大會ヲ開催セル例等ヲ擧ゲ最後ニ横濱上陸以來非常ナ歓迎ヲ受ケ此ノ上モナイ嬉ビデア、ルカ岸（清一）博士カ既ニ七クナリ會ヘナイノカ何ヨリ遺憾デアルトテ故人ノ功績等ヲ述ベ約十五分ニテ會見ヲ終ル

別紙

バイエ、ラッセル伯滞在日程

月	日	午前	午後	午後	晩
三月	二〇日	到来休養 午前七時 東京市役所 午後五時 文部省参事館		午後七時 半分 明治神宮 午後八時 青島博士墓参拜 午後四時 岸博士宅	午後六時 半分 東京俱樂部 福島伯主催 晚餐會
	二一日	休	オリエンタル博覧會 長格待 (午後一時 - 三時) 公使館 邸	東京朝日新聞社主催講演會 (午後三時) 参事會館	東京市長招待 紅葉會
	二二日	休		東京朝日新聞社主催講演會 (午後三時) 公會 堂	觀劇(東京市接待分) 歌舞伎座
	二三日	明治神宮外苑競技場其他 施設實地視察	工芸クラスニ於テアレンチ (東京市接待分)		外國大公使招待? ベルギー 帝國ホテル
	二四日		大日本体育協會長招待 東京會館	引續き接見問題ニ関シ懇談	横浜セントリアセレンツクラフ招待 場所未定
	二五日		外國大公使招待? 米國大使		フランドル公使招待 (午後八時) 自邸
	二六日	習志野			獨逸大使館招待
	二七日	各種競技場其他ノ視察			
	二八日				
三月	二九日	午前九時 芝公園 東京都へ			
	三〇日	東京 都			
四月	一日				
	二日				
	三日	東上、箱根着			
	四日		箱根ヨリ歸京		
	五日	日光へ出張	東照宮見物		
	六日	山中 善寺 湯	日光ヨリ歸京		
	七日				福島伯招待會
	八日		東京市役所 午餐會		バイエ、ラッセル伯招待會
	九日	横濱 出帆(親父丸) 京			

I-0484

0282

0283

I-0484

文書課長

佐

文書課發送 昭和拾壹年參月廿四日發送済

淨書

正校(原稿) (淨書)

主管 情報部長 第二課長

昭和十一年三月廿四日 起草

報二機密 普通 第 〇八 號 昭和拾壹年參月廿四日 附 附屬

受 信 人 名  
陸軍大臣官舎  
別官 牛島大佐

發 信 人 名  
天沼情報部長

件 名  
「パイエ、ラッセル」伯(Le comte de Baillet-Latour)ハ  
我見學許可方依頼ノ件

「目的」マテ下承報中ノ「パイエ、ラッセル」伯、習志野騎兵學  
第十二回「パイエ、ラッセル」大會開催地ニ関スル現地視察

懸案

公 信 案

外 務 省

「パイエ、ラッセル」伯(Le comte de Baillet-Latour)ハ  
(牛島大佐)ニ  
来ル三月廿八日陸軍習志野學校ヲ見學致シキ希望  
ヲ有スルニテ今般全伯ヨリ之ヲ斡旋方見出ノ次第  
アリタル、甘テ全伯ノ地位並ニ、承取ノ使命ニ鑑ミ  
之ノ希望遠方可能申取上層ニ願ヒテ御依頼  
申進ス

公 信 案

外 務 省

24 127

情報部

第二課長

昭和十一年三月廿七日接受  
陸軍

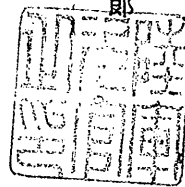
陸普第一六〇一號

國際「オリムピック」委員長「バイエ、ラツール」伯  
陸軍騎兵學校見學ノ件回答

昭和十一年三月廿六日 陸軍次官 梅津 美治郎

外務次官 重光 葵 殿

三月二十四日附報二普通第一〇八號ヲ以テ御申越ニ係ル首題ノ件  
先方希望ノ通許可セラレシニ付承知セラレ度



(小林文七印行)

情報部長

第二課長

(美濃半截野紙)

バイエ、ラツール伯、行渡巴研三氏ヨリ

一、三、二七

一、万事順調ニ進ヒワ、アリ

二、外務省関係御接待トシテ

四月八日午後、アタリ茶會ニテ、御開催アリ

出来得レ、總理ニテ御面接ノ機会ヲ得、ハ幸

ト存セザラレ

三、ラツール伯、四月九日、横浜出帆ノ予定

手記  
四月八日  
夜  
伯、ラツール  
伯、四月九日、横浜出帆ノ予定

ラツール伯、控子愛着

人数、東京市草場

氏ト治令ツタ

外務省

10. 5

I-0484

0284

文書課長

文書課發 昭和拾壹年四月廿日發送済

淨書 (磯野)

正校 (原稿)

(淨書)

主管 情報部長

主任 第二課長

昭和十一年四月二十日起草

報二普通 第一

號

昭和拾壹年四月廿日附

附屬

費用一併

東京市持付

用度係

懸案

受信人	在 白 大森代理大使	發信人	有田大臣
件名	「ラッセル」伯ノ土産品送付ニ関スル件	記録名	
暹羅ニ奉朝ノ國際「オリンピック」委員會會長「バ イエ・ラッセル」伯ハ米國經由帰國シタル処米邦 公 信 案			
外 務 省			

各方面ヨリ同伯ニ贈呈セラレタル土産品(貨物三個)  
 送付方今般東京市ヨリ依頼越シタルニ付テハ  
 便宜上貴館宛四月二十六日横濱出帆ノ日本郵  
 船白山丸事務長ニ委託「アインエルス」港迄送  
 付スルニ付右市查收ノ上同伯ニ市轉交相成方

公 信 案

外 務 省

20 117

I-0484

0285

情報部

第二課長 田代

別紙 添附

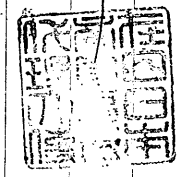
送付連中 第134号

昭和十一年五月拾四日接受

昭和十一年四月二十二日

在 白

臨時代理大使 大森元一郎



外務大臣 有田八郎 殿

「バイエラール伯」の新聞記事切抜き送附の件

當國新聞「アンデパンダ」東京特派員ノ報導ニ依リ日本ニ於ケル「バイエラール伯」の歓迎振リ、聞スル新聞記事切抜き何等沙考迄送附申進ス

南洋記事本要本取敢往電中「上」号リ於テ報告シ置キヨリ合イテ右申添フ

在 白 日本 大使館

I-0484

0286

Handwritten: 東京新聞 21/7/36

# Les Belges au Japon

## Le Comte de Baillet-Latour, président du Comité Olympique International, est venu au Japon étudier la question des Jeux Olympiques de 1940

(De notre envoyé spécial au Japon.)  
 Encore un message de Grande classe que la Belgique vient d'envoyer au Japon et qui y reçoit l'accueil le plus flatteur. Deux mille écoliers rassemblés sur le quai de Yokohama ont fêté l'arrivée du comte de Baillet-Latour et acclimé en son honneur une joyeuse profusion de drapeaux belges et nippons. Et à Tokio, pendant dix jours, on a pu voir, soit à l'entrée des grands clubs, soit dans le hall de l'Hotel Impérial, nos trois couleurs fraternellement associées au globe rouge du Soleil Levant.  
 La visite du comte de Baillet-Latour est de celles que l'on attendait avec impatience, et que l'on se proposait bien d'annoncer de chaleureuses prévenances.  
 C'est qu'à sa qualité de membre de la haute société belge, le visiteur jouit du titre de président du Comité Olympique International et que, tout japonais, brûlé du désir de voir le choix du Comité se porter sur Tokio pour les Jeux de 1940.  
 Certes, le programme de M. de Baillet-Latour a été chargé. Du 26 mars au 9 avril, que de réceptions, d'inspections, de conférences! Il a en l'honneur d'une audience de S. M. l'Empereur; il a effectué le pèlerinage obligatoire au temple de Meiji; puis, successivement, il a été l'hôte du prince Tokugawa, président du Comité directeur aux Jeux Olympiques de 1940, de M. Ushizuka, maire de To-

kyo; de M. Hirayama, président de l'Association des athlètes amateurs; de des ambassadeurs d'Amérique, d'Allemagne, de Belgique, du ministre de Finlande.  
 Non seulement il a visité et inspecté les installations et organisations athlétiques de Tokio, mais encore celles de Yokohama, Osaka, Kyoto, Nara et Kobe. En fin de compte, lorsqu'il s'en retourna, il avait vu tout le Japon sportif.  
 J'ai eu le plaisir de rencontrer le comte de Baillet-Latour à la belle réception donnée en son honneur par M. Iweins d'Eschhoutte, chargé d'affaires de Belgique.  
 — « Quelle est votre impression? » lui-je demandé au président du Comité Olympique International.  
 — Excellente, m'a-t-il répondu, et je ne parle pas de l'accueil des Japonais; ils m'ont comblé d'attentions. Je parle de leur organisation, de leur entraînement et du niveau atteint par eux au point de vue sportif.  
 — Vraiment, ils vous paraissent en progrès?  
 — Ils ont accompli des prodiges de persévérance et de volonté. Je viens de les voir à Garmisch, aux sports d'hiver, où leurs équipes se sont imposées à l'admiration du monde sportif. Je vu ici l'entraînement de leurs équipes de natation; il est absolument remarquable.  
 — Et leur esprit sportif?  
 — Il est hors de discussion et pur de tout mélange. Leurs athlètes amateurs sont de vrais amateurs et l'amateurisme marion, cette plaie du sport occidental, n'a pas contaminé le sport japonais.  
 — Leur présente organisation vous paraît-elle convenir à une manifestation sportive aussi grandiose que celle des Jeux Olympiques?  
 — Les installations que j'ai vues et les projets que l'on m'a fait connaître concernant les stades, les piscines, les terrasses, le village olympique, m'ont paru très bien conçus et parfaitement adaptés aux jeux de 1940. Ils auront sans doute un effort à faire pour améliorer les tribunes et agrandir les hôtels. Mais ils y sont décidés. Ils prévoient un budget global de 15 millions d'Yen (120 millions de francs...).  
 — En résumé, vous voterez pour Tokio?  
 — Je voterai pour Tokio... mais il est évident que je ne puis préjuger du vote du Comité... La seule objection possible serait la distance; mais les compagnies japonaises de navigation et de chemins de fer vont rivaliser de générosité pour abaisser les tarifs de transport.  
 — Le Japon a donc toutes les chances de voir se dérouler à Tokio la XIII<sup>e</sup> Olympiade. »  
 \*\*\*  
 Eh, ajoutai-je à part moi, le Japon, qui n'oublie rien, se rappellera que c'est par l'entremise d'un Belge que cette satisfaction si désirée et si méritée aura été procurée à l'amour-propre national.

F. de LAPOMARÈDE.

文書課長

文書課發送昭和三拾壹年四月廿參日發送済

淨書

正校(原稿)

淨書

主管 情報部長

主任 第二課長

昭和十一年四月廿二日起草

報二普通台第一六〇四號

昭和昭和三拾壹年四月廿參日附

附屬

受 一、九〇の内、大日本体育協会  
副会長 平沼亮三  
東京市長

人 二、牛塚虎太郎

名 三、文部省内  
第十一回西澤「オリビック」招致委員会  
幹事長 三辺長治

發信人名 天利情報部長

記録件名

件名 1. バイエ、ラッセル 他ノ感志談ニ関スル件

本件ニ関シ左白大森臨時代理大使ヨリ別紙寫ノ通電

懸案

取越ニタルニ付急知有テ申了急ニ平交

公信案

外務省

(武省大森代理大使 兼 元 第二号 寫作 平沼 付ノト)

公信案

外務省

別紙

23 153

I-0484

0288



電信寫

要録分

正月  
廿一日  
廿二日  
廿三日  
廿四日  
廿五日  
廿六日  
廿七日  
廿八日  
廿九日  
三十日  
有田外務大臣宛電報(廿月廿二日) 外務省  
白耳義大寺時時代使(外務省)

二十一日「アシデバンドス」紙ハ東京特派員ノ通信トシテ大要左  
ノ如キ「バイユエー、ラツール」(Balliet Estoun)伯ノ訪日感想談ヲ  
撮ケタリ東京市ハ御憐へ請フ  
日本ノ運動界ノ進歩及「アマチュア、スポーツ」精神ハ驚嘆ノ外  
ナシ「オリンピック」大會ノ設備案ハ満足スヘキモノニシテ唯一難  
關タル距離ノ點モ日本ノ船會社及鐵道ノ運費割引ニ依リ緩和セラル  
ヘク東京開催ハ極メテ好望ナリ素ヨリ國際委員會ノ決定ハ豫斷シ難  
キモ自分ハ東京ニ投票スヘシ(了)

I-0484

0289

事務局長 二 三 四

四月八日 外務次官相継

ハイム、ラール 約送別晩餐

一、第十二回 五降、ハ、台、ク、大会招致  
公爵 徳川家達

二、委員、西隆、ハ、ロ、ク、委員、坂井、新島、道正

三、ハ、大、家、切、下、二、四、  
公爵 徳川家達

四、大日本體育会副会長  
平沼 亮三

五、大日本體育会事務理事  
大島 又彦

六、市長 牛塚 虎太郎

東京予報  
得長久光  
中野、多強  
多、協、会  
又、可、也、又、可、  
三、二、大、内、の、の、  
又、内、一、七、八、三

外務省

十三	カ、Conté Baillet-Latour バイエリッー
十二	東京市 秘書長 草 芳
十一	東京市 土木局長 近 藤 三郎
十	東京市 体育協会 会長 高 島 文雄
九	東京市 体育協会 理事 野 保
八	東京市 体育協会 幹事 岩 原 拓
七	東京市 會議長 子爵 森 俊
六	東京市 體育會 副会長 平 沼 亮三
五	東京市 體育會 事務理事 大 島 又彦
四	東京市 市長 牛 塚 虎太郎
三	東京市 文部次官 三 辺 長 治
二	東京市 幹事 岩 原 拓
一	東京市 體育協会 会長 高 島 文雄

外務省

I-0484

0290

電 信 案	東京市、招請 ニ 一 九 四 〇 年 第 一 次 請 願 ニ 関 ス ル 事 件 ノ 件 名 録 記	電送第 6272 號	主 管 情 報 部 長
		昭和十一年四月二十五日午後二時五分發	主任第二課長
東京市、招請 ニ 一 九 四 〇 年 第 一 次 請 願 ニ 関 ス ル 事 件 ノ 件 名 録 記	宛 在 米 齊 藤 大 使	第 九 號	昭和十一年四月二十五日起草
東京市、招請 ニ 一 九 四 〇 年 第 一 次 請 願 ニ 関 ス ル 事 件 ノ 件 名 録 記	發 廣 田 大 臣		

電信課長

外務省

十四	Correspondent of "Echo de Paris" Paris, France
十五	Baron de Saperance
十六	渡辺 町三
十七	情報部長 天羽 英二
十八	情報部第三課長 田代 重 總
十九	
二十	

外務省

I-0484

029:

電 信 案  
外 務 省  
況視察ノ爲過歎来朝セル白国(ラッセル)ハ  
De Bailest-Fatoma 伯ノ目下米田至由歸國  
ノ途ニアル處本月二十八日ヨリ三十日  
貴地滞(在)予定ナルニ付東同伯會  
東京招致ニ対シ多大ノ好意ヲ有シ居ル  
由来朝ノ難(難)命ニモ願(願)シ貴地滞(在)中  
ニ於ケル由伸優遇(方)付特ニ貴大侯ノ御  
配意ヲ緝々キ付(上白) 旅(ナリ)外(ナリ)日(ナリ)本(ナリ)邦(ナリ)

(原議用紙乙)

電 信 案  
外 務 省  
オリムピックシ格身致 委員タル副島 伯(ヨリ) 本(ナリ)官  
兼訪依頼アリタキルニ付テハ 何分ノ御高配  
相(成) 度

(原議用紙乙)

電 信 案  
外 務 省

I-0484

0202

情報部

第二課長

A  
B  
C  
D

紙添付

送通第十五号

昭和七年六月拾貳日接受

昭和十一年五月十三日

在 白

臨時代理大使 大森元一郎



外務大臣 有田八郎 殿

「ハイエラール」伯ノ訪日感為、爾ル新聞切抜送付ノ件

日本訪問ヲ了、先般帰白ニラル際、オリビッ委員長「ハイエラール」伯ハ各地

新聞記者、日本視察ヲ試ミ、オリビッ、東京南催ハ有望ナル旨ヲ接シ、

新聞記事切抜何等申送附ス、東京市人可出、少轉交相煩度

送付書 新聞切抜 一紙

在 白 日 本 大 使 館

I-0484

0293

Yves Sacle 19/5/36

LES JEUX OLYMPIQUES

# Tokio ou Helsingfors?

## Rentrant du Japon, et avant de partir pour la Finlande, en inspection, le comte de Baillet-Latour livre ses impressions

Nous avons à maintes reprises entrepris nos lecteurs de la question des Jeux Olympiques et de la candidature posée par le Japon pour 1940. Nous nous sommes publiés les déclarations faites par le président du Comité Olympique international, notre compatriote, le comte de Baillet-Latour. On sait que ce dernier a fait un voyage d'inspection au Japon. Il vient de rentrer à Bruxelles. Dans quelques jours, il partira pour Helsingfors, qui pose également sa candidature. D'ici quelques temps, voici ce qu'il déclare à notre confrère « Le Soir ».

« J'avais visité l'empire nippon il y a quelque vingt-cinq ans, nous dit-il. La transformation est totale, et elle se manifeste particulièrement dans le domaine sportif, qu'il s'agisse de l'éducation physique de la jeunesse ou de la pratique des sports de compétition. Il n'y a plus trace de cette vieille tendance xénophobe; l'esprit national a évolué dans le sens de la collaboration internationale. D'autre part, dans la plupart des écoles, même dans les villages, des pistes d'entraînement s'offrent aux jeunes gens et aux jeunes filles qui, sous la conduite de moniteurs expérimentés, pratiquent l'éducation physique dans d'excellentes conditions. Les basins de natation sont nombreux. Les sites de natation sont nombreux. Les sites de nos pays ne sont pas de ce genre, ils sont trop petits pour les spectateurs. L'engouement pour le sport, et surtout pour l'athlétisme, est énorme dans toutes les couches de la population. Les programmes scolaires étant trop chargés, l'entraînement dans les divers sports ne peut se faire entre les heures des cours; les élèves et les étudiants renouent spontanément à leurs congés et à leurs vacances pour améliorer leurs conditions physiques et leurs performances. L'entraînement, très rationnellement compris, est alors poussé à fond.

« Cet enthousiasme sportif, continue notre éminent interlocuteur, est la raison principale de la grande réussite des dirigeants du Comité Olympique japonais lorsqu'ils ont sollicité l'honneur d'organiser les Jeux en 1940. Ce succès de nos dirigeants à Tokyo, au Parc Meiji, tandis que les sports d'hiver se pratiquent à Sapporo, on les conditions climatiques sont particulièrement favorables.

« L'Exposition universelle qu'organise le Japon en 1940 ne serait-elle pas un obstacle à la réussite des Jeux, notamment en ce qui concerne nos moyens de transport et de logement? — L'objection, en effet, a été présentée, mais elle tombe d'elle-même. L'Exposition aura fermé ses portes fin août, lorsque commenceront les Jeux. De plus, le gouvernement nippon comptait à proximité du stade de Los Angeles ou encore celui de Berlin. Des pourparlers ont eu lieu et ont abouti avec la principale commission de navigation japonaise et avec le Capitaine Facilio Kaitway, pour rendre ainsi rapide et aussi net onéreux que possible le transport des athlètes et des délégations. Songez qu'autour d'un la traversée du Pacifique ne demande plus que huit jours. Enfin, le Dr Kano et le comte Yoshizima, principaux dirigeants du Comité olympique japonais, se sont mis à la tâche avec ardeur, et le cas échéant, on peut compter sur eux, sur leur dévouement, sur leurs moyens financiers.

« Ce sont eux qui vous ont guidés à Tokio? — Ils se sont montrés pour moi pleins de prévenances; ils m'ont mis en rapport avec tous les meilleurs sportifs et officiels. L'Empereur me-

me qui s'intéresse beaucoup à la question, m'a accordé un entretien d'une demi-heure, au cours duquel tous les aspects du problème ont été passés en revue. Et, ce qu'il faut noter par dessus tout, c'est l'admirable esprit de fair play qui anime les dirigeants sportifs nippons. Malgré leur vif et compréhensible désir de mettre sur pied les Jeux Olympiques, ils ne se formalisent pas si le choix du Comité International ne leur est pas favorable, et les représentants du sport japonais n'en participent pas moins aux Jeux organisés ailleurs.

« Ce n'est pas fair play » se constate dans tous les milieux sportifs japonais, et surtout dans le sport pour le sport, en dehors de tout esprit de haine; il ignore la conception du professionnalisme ou de l'amateurisme amateur; il entre en compétition pour améliorer sa forme, ses performances, pour la gloire... Ce bel esprit pourrait servir d'exemple à leurs.

Le comte de Baillet-Latour ne veut pas prendre personnellement position aujourd'hui, quant au lieu des Jeux de 1940; il se retranche derrière la décision que le Comité international sera appelé à prendre en août prochain, et derrière le caractère de pure information qu'il entend donner à son voyage.

情報部

第二課長

別紙添付

普通第五八號

昭和二年六月九日 接受

昭和十一年五月十四日

在漢堡

総領事

江戸千太郎



外務大臣 有田八郎 殿

國際オリンピック委員會日長「ツール」伯ノ訪日所感

記事 送付ノ件

最近本邦視察ノ上本國ニ歸來セル國際「オリンピック」委員會日長「ツール」伯「一九四〇年第十二次オリンピック大會」ニ關聯シ「独逸通信社(D.N.B.)」在「ブラッセル」記者ニ為セル訪日所感ノ記事 本月十三日ノ當市國粹社會

在漢堡日本總領事館

當機關紙「ハムアルカーター」ダゲブラット紙ニ掲載セラレ居レル

ニ付 何等御参考也 右記事ヲ抜 茲ニ送付ス

追テ 五月十四日ノ在柏林 當黨中央機關紙「フォルキツ」ニ

「オハハター」紙ニモ 同文記事 掲載セラレ居レルニ付 存念心甲

希フ

本館書送付先

在獨共使

在漢堡日本總領事館

I-0484

0295

# Baillet Latour über Olympia 1940

## Begeistertes Lob für Japan - Gegen politische Drahtzieher

H. T. 135, Brüssel, 11. Mai.

Um die Olympischen Spiele 1940 bewerben sich bekanntlich Finnland und Japan. Italien scheint stillschweigend Verzicht geleistet zu haben, denn man hört von italienischen Ansprüchen auf die Fete der 12. Olympiade seit geraumer Zeit nichts mehr. Finnland und Japan unternehmen, um das Rennen zu machen, dafür umso größere Anstrengungen. Soeben ist Graf Baillet-Latour, der Präsident des Internationalen Olympischen Komitees, von seiner Inspektionsfahrt nach Japan wieder nach Brüssel zurückgekehrt, wo er dem DWB gegenüber folgendes erklärte:

„Man macht sich keine Vorstellungen in unserer alten Welt, welche Anstrengungen im Lande der aufgehenden Sonne auf sportlichem Gebiet gemacht werden. Überall wird mit einer Planmäßigkeit und einer Begeisterung ans Werk gegangen, wie wir sie in Europa nur von Deutschland kennen. Die sportliche Erziehung der Massen ist in einem Grade entwickelt, der mich als Belgier fast mit Neid erfüllen könnte.“

Der olympische Gedanke ist in den Kreisen der japanischen Sportler erstaunlich tief verankert. Es ist mir nicht einmal, sondern des öfteren passiert, daß ich auf der Reise durch japanische Dörfer und Städte mit den Vertretern des Japanischen Olympischen Komitees überall dort, wo unsere Durchfahrt bekannt geworden war, von tausenden begeisterter Sportler und Sportlerinnen an den Bahnhöfen und auf den Straßen stürmisch begrüßt wurde.

Welche Verbreitung der Sport in Japan genommen hat, mag man übrigens daraus ersehen, daß ich auf meiner Reise auch in kleinsten Städten Kampfbahnen für Leichtathletik und Schwimmen vorgefunden habe. Am meisten überraschte mich dabei das Vorhandensein kleiner Schwimmbecken auch in Dörfern!

„Glauben Sie, Herr Graf, daß die Sportanlagen in Tokio für die Durchführung der Olympischen Spiele geeignet sind?“

„Zweifelslos. Im Herzen der japanischen Hauptstadt liegt im Meiji-Park eine große Kampfstätte mit allen Einrichtungen zur Abhaltung fast aller sportlichen Wettbewerbe. Das Stadion unterscheidet sich von den bei uns üblichen lediglich dadurch, daß es keine Zuschauertribünen aufweist. Man ist in Japan, vielleicht sehr richtig, der Auffassung, daß Sport in erster Linie ein Erziehungsmittel ist, und daß es daher wichtiger ist, zunächst die Kampfstätte und Trainingsgelegenheit für die Sportler und erst dann Plätze für die Zuschauer zu schaffen. Unmittelbar neben der Hauptkampfbahn liegt ein großes Schwimmbecken, das ebenfalls keine Sitztribünen aufweist. Es wird jedoch nicht schwer fallen, für die Zwecke der Olympischen Spiele, für die beide Kampfstätten hervorragend geeignet sind, auch die nötigen Zuschauertribünen zu schaffen.“

„Hat man in Japan bereits die Möglichkeiten der Unterbringung der Wettkampfteilnehmer sowie der aus allen Erdteilen zu erwartenden Zuschauer untersucht?“

„Auch an dieses Problem hat das japanische Komitee bereits gedacht. Man beabsichtigt für den Fall einer Entscheidung des DWB für Japan die Schaffung eines Olympischen Dorfes nach dem Vorbild von Los Angeles und Berlin, und für die Zuschauer sind die großen Hotels der japanischen Hauptstadt, die nach europäischem Muster eingerichtet sind, meines Erachtens durchaus ausreichend. Ueberhaupt habe ich den Eindruck, daß die Japaner, die in der sportlichen Organisation ebenso wie in der Auffassung der Pflichten des Individuums gegenüber dem Staat sich an ähnliche Richtlinien halten wie das

deutsche Volk, aller organisatorischer Schwierigkeiten Herr werden könnten.“

„Würde die japanische Weltausstellung 1940 den Spielen nicht irgendwie Abbruch tun?“

„Keinesfalls, da die Weltausstellung zur Zeit der Eröffnung der Spiele bereits über einen Monat ihre Pforten geschlossen haben wird. Der Hauptstrom der Fremden, die also nur der Ausstellung wegen nach Japan gekommen sind, wird das Land bereits verlassen haben, so daß hinsichtlich der Unterbringungsmöglichkeiten kaum Schwierigkeiten entstehen können.“

„Glauben Sie, daß das Internationale Olympische Komitee sich für Japan entscheiden wird?“

„Diese Frage kann ich zur Zeit noch nicht beantworten, zumal hierauf auch der Ausgang meiner Reise nach Finnland, die ich voraussichtlich in der nächsten Woche antreten werde, nicht ohne Einfluß sein wird.“

Auf dieser Finnland-Reise werde ich alle Möglichkeiten für die Abhaltung der Spiele in Helsingfors mit der gleichen Objektivität untersuchen, wie auf meiner Reise in den Fernen Osten. Bei meinem Aufenthalt in Japan und nach Rücksprache mit den verschiedensten Persönlichkeiten des japanischen Sports und der Regierung habe ich jedenfalls den Eindruck gewonnen, daß die Japaner unter dem Leitmotiv des „Fair Play“, das sie auf sportlichem Gebiet in jeder Hinsicht befeelt, auch im Falle einer Entscheidung für Finnland an den Spielen teilnehmen würden.“

Und wie beurteilen Sie die Aussichten der olympischen Spiele in Berlin?“

„Nach dem glänzenden Verlauf der Winterspiele in Garmisch-Partenkirchen steht es für mich außer Zweifel, daß die Organisation der Spiele hervorragend und vollkommen einwandfrei sein wird, und daß der sportliche Gedanke bei den Vätern den Sieg über alle Gefühle des Hasses davontragen wird. Wir wissen genau, von welcher Seite die Angriffe gegen die Abhaltung der Spiele in Berlin kommen, so daß wir sie vollkommen ignorieren können. Die Auffassung in den Kreisen der aktiven Sportler der meisten Länder ist erfreulicherweise so, daß auf die Machenschaften politischer Drahtzieher keine Rücksicht genommen zu werden braucht. Ich bin überzeugt, daß auch das Ausland riesige Zuschauermengen nach Berlin schicken wird, gehen doch selbst bei mir täglich unzählige Anfragen nach Eintrittskarten ein.“

F. O. E.

Hamburger Tageblatt,

13. Mai 1936.

I-0484

0296





情報部

第二課長

A B C D

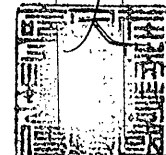
昭和十一年六月卅日 接収

光通カト五号

昭和十一年六月六日

在瑞典

特命全權公使 白鳥敏



外務大臣 有田八郎殿

「オロムピツ」委員令委員長「バイエラトゥール」伯ノ

当地ニ於ケル新地者ト令見誘ニ角レ報告ノ件

令般「オロムピツ」委員令委員長「バイエラトゥール」伯ハ獨逸

「オロムピツ」大令準備委員令委員長「エワート」ト共ニ

芬蘭ニ赴ク途中六月ニカ当地ニ立寄リ新地者ノ

「インターヴィウ」ニ答ヘ大要左記ノ要ニ如ク我「オロム

ピツ」大令拓政途程ニ對シ注意アル見解ヲ述ベル

在瑞典日本公使館

ニ付右新地切括係此般何事ヲ為ス  
ト報カス

在瑞典日本公使館

I-0484

0298

ノ記

六月三日「スウェーデン」カ「グロブ」ラ「デット」要「訳」  
 「フィンランド」へ「新」リ「途」六月二日「スト」ホルム「ヲ」通過セル「ラトウ」ム  
 伯「先」般「ノ」日本「新」リ「テ」最「良」ノ「印」象「ヲ」得「テ」モ「ラ」レ「シ」日本「ノ」ス「ポ」  
 「ツ」物「況」ニ「付」テ「進」ニ「テ」ユ「ツ」ク「リ」話「シ」タ「イ」モ「ト」足「エ」テ  
 「東京」市「カ」何「等」困「難」を「シ」レ「ニ」九「四」年「ノ」オ「リ」ン「ピ」ツ「大会」ヲ「角」  
 催「シ」ル「ユ」ト「ハ」疑「ヒ」セ「イ」モ「タ」同「國」ノ「ス」ポ「ツ」ノ「進」上「ウ」ハ「安」ク  
 自「覚」シ「テ」テ「ラ」ニ「カ」ル「ナ」方「面」を「最」上「ト」シ「日本」國「民」ハ「人」ノ「中」非「常」ナ  
 「ハイ」ス「タ」ン「ダ」イ「ド」ノ「ス」ポ「ツ」ノ「國」民「ヲ」ア「ツ」テ「ス」ポ「ツ」ノ「報」ハ「益」々  
 「盛」テ「アル」八月「カ」九「月」ニ「至」テ「東京」ヲ「競」技「カ」行「ハ」レ「ト」ス「ル」ト  
 暑「ク」テ「困」ル「カ」ラ「ウ」ト「心」配「ス」ル「者」カ「アル」カ「例」ハ「一」九「二」年「ノ」ス「ト」ア「フ」  
 「ホルム」オ「リ」ン「ピ」ツ「大会」ノ「如」ク「同」シ「ク」見「者」カ「フ」勿「論」見「者」イ「カ」ラ「ウ」カ  
 其「ノ」為「ニ」競「技」ヲ「止」セ「ル」ハ「ナ」ラ「ズ」ナ「イ」抑「ナ」モ「ト」ハ「絶」み「ユ」セ「イ」

在瑞典日本公使館

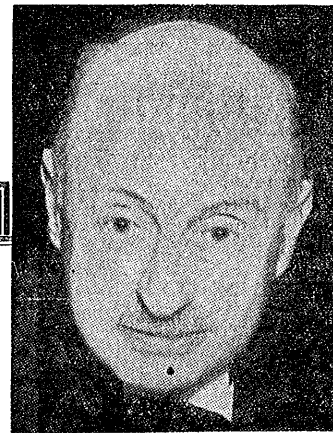
日本「カ」歐「州」ニ「選」キ「テ」送「フ」テ「居」ル「ニ」歐「州」カ「同」地「ニ」選「キ」テ  
 送「レ」ナ「イ」モ「ト」ハ「アル」マイ「ウ」イ「ニ」テ「ス」ポ「ツ」ニ「付」テ「ハ」心「配」ハ「ム」用「ダ」  
 東京「カ」多「數」時「ヲ」一「年」ニ「通」テ「南」方「カ」アル「カ」ラ「ズ」  
 「ラトウ」ム「伯」ハ「一」九「四」年「ノ」オ「リ」ン「ピ」ツ「大会」ヲ「日本」ヲ「南」催  
 「ニ」テ「能」性「ニ」付「テ」確「信」アル「モ」ラ「レ」テ「見」エ「テ」最「良」ノ「一」九「四」  
 年「ノ」オ「リ」ン「ピ」ツ「大会」内「務」ハ「日本」ト「芬」蘭「ノ」内「務」ヲ  
 無「ク」テ「東京」ト「ヘル」シ「ン」グ「フォルム」ノ「内」務「ヲ」文「ニ」テ「國」民  
 的「考」慮「ヲ」入「レ」テ「ハ」ナ「ラ」ズ「ナ」イ「特」ニ「注」意「シ」テ「言」フ「結」語「ヲ」

在瑞典日本公使館

I-0484

0299

SVENSKA  
DAGBLADET  
3/6 1936.



Greve Baillet-Latour.

## Tokio kan arrangera Spelen 1940.

### Baillet-Latours åsiikt.

En av de mest ovissa tävlingarna under Berlinolympiaden blir utan tvivel dragkampen mellan Helsingfors och Tokio, gällande det hedrande uppdraget att arrangera de olympiska spelen 1940. Chanserna väga f. n. ungefär lika, och ännu kan ingen med säkerhet ge svar på frågan: vart går olympiska spelen 1940?

Presidenten i Internationella olympiska kommittén, den franske greven Baillet-Latour, befann sig på tisdagen på genomresa i Stockholm på väg till Finland, och inte ens han kunde ge den allra minsta lilla antydning om vart chanserna luta. I sitt sällskap hade han hr Th. Lewald, ordförande i den tyska kommittén, men inte heller från det hållet gick det an att få några betydelsefullare uppgifter, som kunde ligga till grund för att lösa det olympiska problemet 1940.

Greve Baillet-Latour, diplomat ända ut i fingerspetsarna, föreföll emellertid att ha fått de bästa intryck från sin senaste japanska resa och han talade både länge och gärna om de idrottsliga förhållandena i den uppgående solens land.

— Det är inget som helst tvivel om att Tokio utan svårighet kommer att gå i land med uppgiften att anordna 1940 års olympiad, förklarar greve Baillet-Latour, utvecklingen har gått raskt undan där liksom överallt annorstädes, och de tekniska resurserna äro tip top. Japanerna äro numera ett idrottande folk i mycket hög grad, och idrotten gör allt mera landvinnningar.

### Ingen fara med värmen!

— Apropos den omtalade värmen i Japan vid tiden för de olympiska sommarspelen i augusti—september så kan nämnas, att det var ungefär lika hett t. ex. i Stockholmsolympiaden 1912. Varmt kommer det helt naturligt att bli, men så hett, att det kan bli tal om att inställa hela tävlingen, kan det aldrig bli. Och när japanerna kunna resa till oss för att delta i olympiska spel, så är det väl förresten inte värre, än att vi också kunna besöka dem.

— Någon fara för att vinterspelen skulle behöva krypa i skrinet existerar helt enkelt inte. Några timmars tågresa från Tokio långt uppe bland bergen ligger nämligen en plats, som heter Sapporo, och den blir — i den händelse Japan får spelen — olympisk tummelplats under vinterveckan.

Monsieur Baillet-Latour verkade f. ö. att ha blivit högeligen imponerad av de japanska möjligheterna att arrangera spelen 1940, och till slut ville han även allvarligt betona, att den olympiska frågan anno 1940 inte är en uppgörelse mellan Japan och Finland utan mellan Tokio och Helsingfors.

Några nationella hänsyn få inte tagas i ett fall som detta.

I-0484

0300

發信用		執務用	
主信	4		4
附甲	4		4
附乙			
附丙			
附丁			
備考			

懸案

文書課發 昭和拾壹年六月拾五日發送済

情報部長 主任 第二課長

報二 普通令第一三四九號 昭和拾壹年六月拾五日附 附屬

受 第十二回理事 河原春作 牛塚虎太郎 田中 三

信 理事長 牛塚虎太郎 田中 三

人 三 理事長 牛塚虎太郎 田中 三

名 九ノ内、九ノ内

件 大下、佐藤、平沼

名 バイエ、ラッセル、伯、勤、野、山、三

御参考迄別紙茲ニ送付ス

(昭和十一年三月十一日附在 瑞興 館來利第一六 號並附屬書)

公 信 案 外 務 省

淨書 (原稿) 傳 (淨書)

昭和十一年六月十二日起草

15 86

發信用		執務用	
主信	2		2
附甲	2		2
附乙	2		2
附丙			
附丁			
備考			

懸案

文書課發 昭和拾壹年六月拾五日發送済

情報部長 主任 第二課長

報二 普通令第一三四九號 昭和拾壹年六月拾五日附 附屬

受 第十二回理事 河原春作 牛塚虎太郎 田中 三

信 理事長 牛塚虎太郎 田中 三

人 三 理事長 牛塚虎太郎 田中 三

名 九ノ内、九ノ内

件 大下、佐藤、平沼

名 バイエ、ラッセル、伯、勤、野、山、三

御参考迄別紙茲ニ送付ス

(昭和十一年五月十日 日附在 漢堡 館來利第一五八 號並附屬書)

公 信 案 外 務 省

淨書 (原稿) 傳 (淨書)

昭和十一年六月十一日起草

13 50

I-0484

030:

文部省成オリム  
ピック  
係より場合  
報支る

土乃乃  
通信

電信寫

招請委員一〇七八〇平

本モソイホルム省

十一月後發情  
本月十一日夜着

有田外務大臣

白鳥公使

第大號

芬蘭社本使電報

第三號

大臣へ電報アリタシ

第四號 在若蘭市河書記官未電寫

「オリムピック」委員長「ラッセル」當地視察ノ際各地ニ於ケル演  
説、會見談等ニ於テ一九四〇年ハ日本ニ關係方適當ナル旨ヲ屢々仄  
カシ届レリ(了)

lis

I-0484

0302



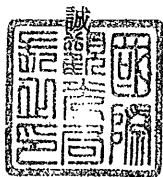
鐵道省

拜啓 愈々御清穆奉賀候  
陳者報二普通合第二三五六號ヲ以テ御送付相成候「バイエ・ラ  
ツール」伯訪日感想ニ關スル新聞切抜貴重ナル情報トシテ有難  
拜讀致シ茲ニ厚ク御禮申上候

敬具

外務省情報部長  
天羽英二殿

國際觀光局長  
田



國觀庶第三四四號

昭和十一年六月二十二日

愛せし風景美化せし國土

懸案

主信	4	4
附甲	4	4
附乙	4	4
附丙		
附丁		
備考		

公文書	昭和十一年六月二十二日附在	白々使館來往普通第一五二號並附屬書
御参考迄別紙茲ニ送付ス		
名件	ハイエ、ラツール」伯ノ感想後ニ関スル件	
名件録記		
名人信發		天羽情報部長
報二普通合第二三五六號	昭和三拾壹年六月拾五日附	附屬
主情報部長	任主	第二課長
文書課發送	昭和拾壹年六月拾六日發送済	
淨書	正校(原稿)	(舎) (淨書)
A	昭和三拾壹年六月拾二日起草	
C		

15 159

別紙

文書課長

I-0484

0303

	發信用	執務用
主信	}	}
附屬	甲	}
	乙	}
	丙	
丁		
備考		

懸案

公 信 案	(昭和十一年六月二十一日附在 瑞典 館來往 第一〇五 號並附屬書) <small>日本文</small>	御參考迄別紙茲ニ送付ス	件名 ハイエ、ラットル 他、ノ、勅諭ニ関スル件	受 東京市長 牛塚虎太郎 文部省 外務省 第二四局 隆ノリ、色ノリ、招致委員会 警事長 河原 壽作 丸の内 大田区 作 青柳 守 刑務長 石原 三	發信人 天向情報部長	記録件名 天向情報部長	報 普通 第二六〇七 號 昭和拾壹年七月三日 日附 附屬	主 情報部長 主任 第二課長	文書課發送 昭和拾壹年七月四日 發送済 淨書 正校(原稿) (淨書)	文書課長 別紙
				外務省						

3 39

I-0484

0304